

保育専攻学生の子どもの健康に対する学習について

——学習の動機付けと知識の定着——

木 村 達 志

A Learning of Early Childhood Education and Care Students in Child Health

—Focus on the Motivation of Learning and Establishment of Knowledge—

Tatsushi KIMURA

I. 緒言

本学では、子どもの健康に対する学習について、子どもの保健ⅠA（講義）および保育内容指導法生活と健康（演習）などを1年次に設定している。子どもの保健ⅠAは、1年次前期に30時間2単位で開講し、児童福祉法施行規則6条の2第1項3号による教科目・区分等では保育の本質・目的に関する科目であり、保育士資格の必修単位となっている。同様に、保育内容指導法生活と健康（演習）は、1年次前期（一部は後期）に30時間2単位で開講し、保育士資格では保育の内容・方法、幼稚園教諭1種免許状では保育内容の指導法に関する科目であり、必修単位となっている。

両教科目とも学習すべき内容は多岐にわたり、医学、看護学、生理学、さらには統計学の知識も習得する必要がある。特に講義系科目は、学生を1つの教室に集めてテキストを用いた一斉授業を行うため、学習定着をいかに図るかが大きな課題となっている。これは大学生の学習における共通する課題であり、河村・志内（2005）ら⁽¹⁾は、一斉授業における学習定着度の低下の問題提起をしている。また、他大学を含めた保育者養成校の学生の多くは、教育実習や保育実習を経験しない段階でこれらの科目を受講することになっており、当該科目に対する学習の動機づけを高い状態にするためには、いくつかの工夫が必要ではないかと思われる。上記の教科目に限ったことではないが、坂本（2009）⁽²⁾は、「大学では多くの科目で講義の最終日が試験日になっており、学生たちはテスト時期になって短期間で学習する傾向があり、なかなか知識が身に付かない」と述べている。

そこで、本研究では、幼児教育・保育専攻学生を対象として、本人の学習歴やボランティア経験など学習者の背景と学習の動機づけとの関係を明らかにし、知識の定着を図るための方策や授業改善のポイントを探りたいと考えている。

II. 研究の対象と方法

1. 対象

上記の研究目的を達成するため、2017年度前期における子どもの保健ⅠA および保育内容指導生活と健康の受講者197名を対象とした。

2. 方法

図1に示す内容で自記式のアンケートを実施した。アンケートの実施にあたり、対象者へは調査の意義や回答することに対する不利益はない事、個人名が公表されることはない事などを口頭およびアンケート用紙中の文書で説明し、研究参加への同意を得た。アンケート回収率は86.8% (171/197例) であり、回収できた回答は全てが有効回答であった。

なお、本研究は桜花学園大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した (2017年10月2日、受付番号02)。

III. 結果

1. 基本統計量

対象者プロフィールの主な内容について図2から図8に示した。単数回答を円グラフで示し、複数回答は縦棒グラフで示した。単数回答の例数は、有効回答数の171例である。

学習者の当該科目に関するイメージであるが、学習内容が多いと感じているかの問いに対して「とても強く感じた」および「よく感じた」の合計で84.2%であり (図2)、科目に対するイメージでも「学習内容が多い」が第1位であった (図7)。その一方で、「保育者や母親になった時に役立つ」や「子どもの健康管理には不可欠と思う」が順に第2位と第3位であった (図7)。これまでの幼稚園や保育園への訪問経験は「1、2回程度」が57.3%であり、「よくある」が36.3%であった (図3)。からだの仕組みや発達に対する興味では、「まあまあある」および「とてもある」の合計が62.6%であった (図4)。自分の健康管理については、「まあまあある」および「とてもある」の合計が78.3%であった (図6)。保健領域に関する知識の活用経験は、「大いにある」は7.6%と少数であった (図5)。保育専門職に対する学問的な知識の必要性は、「とても思う」と「まあまあ思う」で95.9%であった。Q12の「どのような仕組みがあったら、きちんと復習ができると思いますか」では、「小テストを複数回する」が83例 (複数回答) であり他の選択肢と比較し多数であった。

<p>Q.1 「子どもの保健ⅠA」又は「保育内容指導法 生活と健康」について、覚えるべき内容が多いと感じましたか。</p> <p>① とてもよく感じた</p> <p>② 良く感じた</p> <p>③ 普通であると感じた</p> <p>④ あまり感じなかった</p> <p>⑤ 全く感じなかった</p>	<p>Q.9 「子どもの保健ⅠA」又は「保育内容指導法 生活と健康」について、復習をしましたか。</p> <p>① とてもした</p> <p>② まあまあした</p> <p>③ あまりしなかった</p> <p>④ 全くしなかった</p>
<p>Q.2 中学校や高等学校の職業体験又はボランティアなどで幼稚園や保育園に行ったことがありますか。</p> <p>① よくある</p> <p>② 1, 2 回程度ある</p> <p>③ 全くない</p>	<p>Q.10 「子どもの保健ⅠA」又は「保育内容指導法 生活と健康」について、どのようなイメージを持っていますか (複数選択可)。</p> <p>① 難しい</p> <p>② 覚えるべき内容が多い</p> <p>③ 苦手である</p> <p>④ 子どもの健康管理には不可欠</p> <p>⑤ 面白い</p> <p>⑥ 数学や統計は外してほしい</p> <p>⑦ 興味が薄い</p> <p>⑧ 自分が保育者や母親になった時に役立つ</p>
<p>Q.3 「子どもの保健ⅠA」又は「保育内容指導法 生活と健康」について、中学校や高等学校の家庭科や保健体育の授業で、すでに学習していた内容がありますか。</p> <p>① たくさんあった</p> <p>② いくつかはあった</p> <p>③ ほぼ新しい内容であった</p>	<p>Q.11 「子どもの保健ⅠA」又は「保育内容指導法 生活と健康」について、自分の学習態度は良好であったと思いますか。</p> <p>① とても良かった</p> <p>② 良かった</p> <p>③ 普通である</p> <p>④ あまり良くなかった</p> <p>⑤ 良くなかった</p>
<p>Q.4 あなたは、からだを動かすことが好きですか。</p> <p>① とても好き</p> <p>② まあまあ好き</p> <p>③ どちらでもない</p> <p>④ あまり好きではない</p> <p>⑤ 嫌いである</p>	<p>Q.12 どのような仕組みがあったら、復習ができると思いますか。</p> <p>① 授業内又は授業外での簡単な小テスト</p> <p>② 学期中に複数回のレポート提出</p> <p>③ その他 ()</p>
<p>Q.5 からだの仕組みや発達について興味がありますか。</p> <p>① とてもある</p> <p>② まあまあある</p> <p>③ どちらでもない</p> <p>④ あまりない</p> <p>⑤ 全くない</p>	<p>Q.13 保育専門職に就くためには、専門的な知識が必要であると思いますか。</p> <p>① とても思う</p> <p>② まあまあ思う</p> <p>③ どちらでもない</p> <p>④ あまり思わない</p> <p>⑤ 全く思わない</p>
<p>Q.6 「子どもの保健ⅠA」又は「保育内容指導法 生活と健康」について、現時点で学習の必要性を感じますか。</p> <p>① とても感じる</p> <p>② まあまあ感じる</p> <p>③ どちらでもない</p> <p>④ あまり感じない</p> <p>⑤ 全く感じない</p>	<p>Q.14 「子どもの保健ⅠA」又は「保育内容指導法 生活と健康」の学習について、内発的動機づけを持つためには何が必要であると思いますか。</p> <p>① 自分の子どもを育てる</p> <p>② 幼稚園や保育園に現場を知る</p> <p>③ 保育者になるという目標をしっかりと持つ</p> <p>④ その他 ()</p>
<p>Q.7 これまで「子どもの保健ⅠA」又は「保育内容指導法 生活と健康」について学習した内容 (高校までで学習した内容も含む) について、その知識を活用した経験はありますか。</p> <p>① ある</p> <p>② 少しある</p> <p>③ ない</p>	
<p>Q.8 自分自身の健康管理について、興味がありますか。</p> <p>① とてもある</p> <p>② まあまあある</p> <p>③ どちらでもない</p> <p>④ あまりない</p> <p>⑤ 全くない</p>	

図1 アンケートの内容

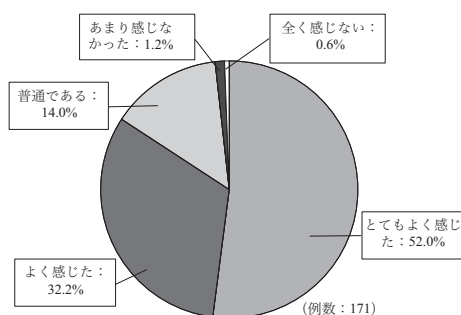


図2 学習内容が多いと感じるか

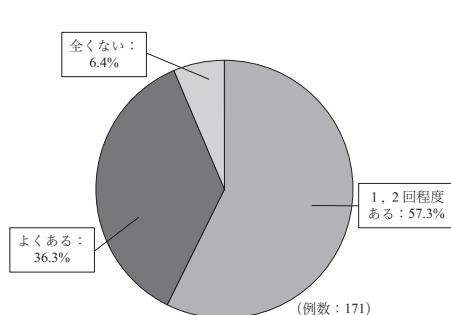


図3 幼稚園や保育園への訪問経験

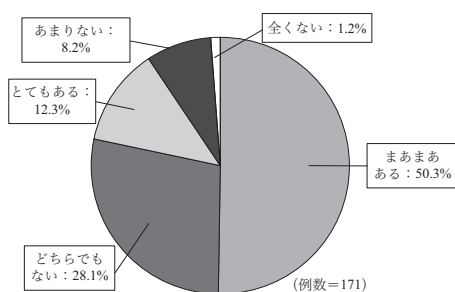


図4 からだの仕組みや発達に対する興味

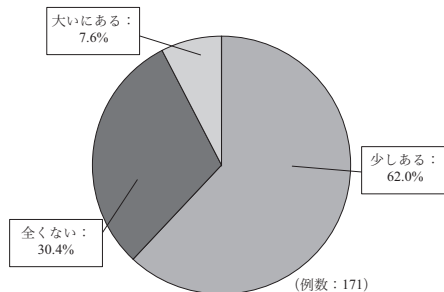


図5 保健領域に関する知識の活用経験

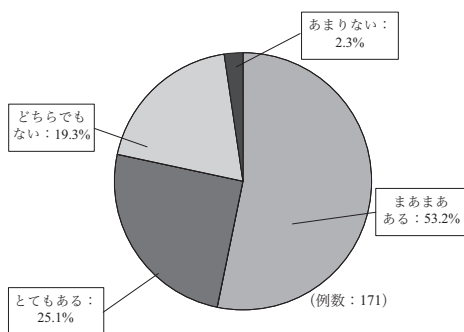


図6 健康管理について興味があるか

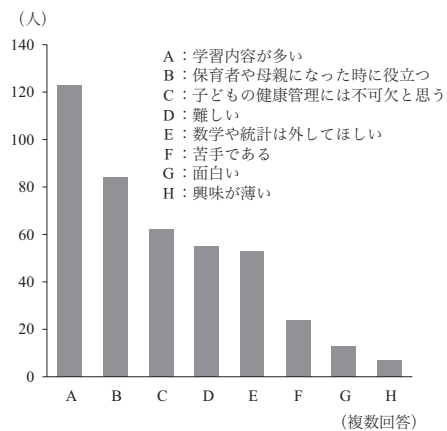


図7 当該科目に対するイメージ

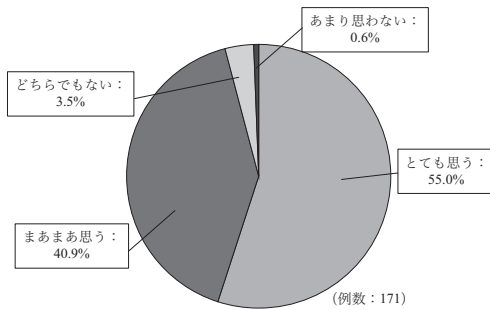


図8 保育専門職に対する学問的な知識の必要性

2. クロス集計

本研究では、カテゴリ化した項目の変数と他の質問項目の変数とのクロス集計と有意差検定（カイ二乗検定）を行った。複数回答については、各選択肢の回答の有無で単数回答として再カテゴリ化を行った。有意水準は5.0%未満を有意とした。その結果、表1から表7のように有意な差を示した結果が得られた。

表1-1から表1-3は、からだの仕組みや発達に対する興味と他の項目との関連を示している。表1-1では、からだの仕組みや発達に対する興味が「まあまあある」や「とてもある」と回答した者は、当該科目に対する学習の必要性を「まあまあ感じる」や「とても感じる」と回答した者が高率であった。表1-2では、からだの仕組みや発達に対する興味が「まあまあある」や「とてもある」と回答した者は、当該科目の復習を「まあまあした」や「とてもした」と回答した者が高率であった。表1-3では、からだの仕組みや発達に対する興味が「まあまあある」や「とてもある」と回答した者は、自分の学習態度が「良かった」や「とても良かった」と回答した者が高率であった。

表1-1 Q5とQ6の関係

		からだの仕組みや発達に対する興味があるか					合 計
		全くない	あまりない	どちらでもない	まあまあある	とてもある	
当該科目に対する学習の必要性を感じるか	あまり感じない	1	2	1	0	0	4
	どちらでもない	1	3	11	1	0	16
	まあまあ感じる	0	4	28	41	3	76
	とても感じる	0	5	8	44	18	75
	合 計	2	14	48	86	21	171

カイ二乗値＝80.6403、自由度＝12、 $P<0.001$

表1-2 Q5とQ10の関係

		からだの仕組みや発達について興味があるか					合 計
		全くない	あまり ない	どちらでも ない	まあまあ ある	とても ある	
当該科目に ついて復習 をしたか	全くしなかった	1	2	7	2	0	12
	あまりしなかった	0	6	27	41	9	83
	まあまあした	1	6	13	39	11	70
	とてもした	0	0	1	4	1	6
	合 計	2	14	48	86	21	171

カイ二乗値＝20.8481、自由度＝12、 $P<0.05$

表1-3 Q5とQ11の関係

		からだの仕組みや発達について興味があるか					合 計
		全くない	あまり ない	どちらでも ない	まあまあ ある	とても ある	
学習態度は良 好であったと 思うか	良くなかった	0	0	2	0	0	2
	あまり良くな かった	0	2	1	1	0	4
	普通である	2	7	30	47	7	93
	良かった	0	4	13	30	8	55
	とても良かった	0	1	2	8	6	17
	合 計	2	14	48	86	21	171

カイ二乗値＝28.6334、自由度＝16、 $P<0.05$

表2-1から表2-3は、当該科目に対する学習の必要性和他の項目との関連を示している。表2-1では、当該科目に対する学習の必要性を「まあまあ感じる」や「とても感じる」と回答した者は、当該科目の復習を「まあまあした」や「とてもした」と回答した者が高率であった。表2-2では、当該科目に対する学習の必要性を「まあまあ感じる」や「とても感じる」と回答した者は、子どもの健康管理に不可欠と回答した者が高率であった。表2-3では、当該科目に対する学習の必要性を「まあまあ感じる」や「とても感じる」と回答した者は、当該科目を苦手と感じている者が低率であった。

表2-1 Q6とQ9との関係

		当該科目について学習の必要性を感じるか				
		あまり 感じない	どちらでも ない	まあまあ 感じる	とても 感じる	合 計
当該科目について 復習をしたか	全くしなかった	2	3	5	2	12
	あまりしなかった	0	9	41	33	83
	まあまあした	2	4	26	38	70
	とてもした	0	0	4	2	6
	合 計	4	16	76	75	171

カイ二乗値=23.7945、自由度=9、P<0.01

表2-2 Q6とQ10（子どもの健康管理に不可欠）との関係

		当該科目について学習の必要性を感じるか				
		あまり 感じない	どちらでも ない	まあまあ 感じる	とても感じる	合 計
子どもの健康管理 に不可欠	いいえ	4	14	53	38	109
	はい	0	2	23	37	62
	合 計	4	16	76	75	171

カイ二乗値=12.9128、自由度=3、P<0.01

表2-3 Q6とQ10（苦手である）との関係

		当該科目について学習の必要性を感じるか				
		あまり感じない	どちらでもない	まあまあ感じる	とても感じる	合 計
苦手である	いいえ	2	11	62	72	147
	はい	2	5	14	3	24
	合 計	4	16	76	75	171

カイ二乗値=15.6899、自由度=3、P<0.01

表3-1から表3-3は、保健領域の知識の活用経験と他の項目との関連を示している。表3-1では、保健領域の知識の活用経験が「少しある」や「大いにある」と回答した者は、当該科目を「面白い」と回答した者が高率であった。表3-2では、保健領域の知識の活用経験が「全くない」と回答した者は、当該科目の復習を「全くしなかった」や「あまりしなかった」と回答した者が高率であった。表3-3では、保健領域の知識の活用経験が「少しある」や「大いにある」と回答した者は、当該科目の学習態度が「良かった」「とても良かった」と回答した者が高率であった。

表3-1 Q7とQ10（面白い）との関係

		保健領域の知識を活用した経験			
		全くない	少しある	大いにある	合 計
当該科目は面白いか	いいえ	51	98	9	164
	はい	1	8	4	7
	合 計	52	106	13	171

カイ二乗値＝12.3209、自由度＝2、 $P<0.01$

表3-2 Q7とQ9の関係

		保健領域に関する知識の活用経験			
		全くない	少しある	大いにある	合 計
当該科目について復習をしたか	全くしなかった	10	2	0	12
	あまりしなかった	28	51	4	83
	まあまあした	12	51	7	70
	とてもした	2	2	2	6
	合 計	52	106	13	171

カイ二乗値＝29.0447、自由度＝6、 $P<0.01$

表3-3 Q7とQ11の関係

		保健領域に関する知識の活用経験			
		全くない	少しある	大いにある	合 計
当該科目の学習態度は良好であったか	良くなかった	2	0	0	2
	あまり良くなかった	2	2	0	4
	普通である	33	57	3	93
	良かった	14	36	5	55
	とても良かった	1	11	5	17
	合 計	52	106	13	171

カイ二乗値＝23.3471、自由度＝8、 $P<0.01$

IV. 考察

子どもの保健ⅠAおよび保育内容指導生活と健康は、医学や保健領域に関する科目であり、学習すべき内容は多岐にわたっている。このような中で、学習内容の定着をいかに図るかが大きな課題となっており、少しでも課題解決の方策を見出すことが出来ないかと考え本研究を行った。

学習すべき内容の多さなどについては、本研究の対象者もダイレクトに感じているようであり、図2や図7の結果に表れている。しかし、当該科目について「学習内容が多い」と感じている一方で、「保育者や母親になった時に役立つ」や「子どもの健康管理には不可欠と思う」と回答している者が多く存在する（図7）。それ故、授業の中で学習している内容が、どのよ

うに将来役立つのか、また必要であるかの具体例を折に触れて示しながら進めていくことが、学習の動機づけの一助になるのではないかと思われた。

次に、本研究における対象者のこれまでの幼稚園や保育園への訪問経験は「1、2回程度」が57.3%であり、これは中学校や高校での職業体験によるものと思われ、「よくある」の36.3%が自主的なボランティア経験者ではないかと著者は予想しているが、幼稚園や保育園への訪問経験については、その動機についても設問を立てるべきであった(図3)。表3-1から3-3で示したQ7の『これまで「子どもの保健ⅠA」又は「保育内容指導法 生活と健康」について学習した内容(高校までで学習した内容も含む)について、その知識を活用した経験はありますか。』と他の項目との関連では、知識の活用経験がある者ほど前向きな回答をしている。さらに、知識の活用経験が「大いにある」は7.6%と少数であることから(図5)、当該科目における学習の動機づけは幼稚園や保育園においてその知識を活用することが関係しているので、保育現場でのボランティア経験を積むことが動機づけの面でも勧められる。

また、表2-1から2-3で示したQ6の『「子どもの保健ⅠA」又は「保育内容指導法 生活と健康」について、現時点で学習の必要性を感じますか。』と他の項目との関連では、学習の必要性を感じている者ほど復習の状況はよく、子どもの健康管理に不可欠だと回答している。反対に必要性を感じていない者ほど、当該科目を苦手と感じている。これらの結果は当然と解釈できるが、学習の必要性をいかに感じるかは、やはり保育現場での活動経験と関係しているのではないかと思われた。同じように、原田(2016)⁽³⁾の報告では、「保育園実習での健康教育を実践する事は幼児への成長・発達を理解はもとより、この時期に健康の必要性と指導方法を理解できた事が示唆された。」とあり、保育現場での実習やボランティア実践などによって理論の学習が深められ定着が図られたことが示されている。

それでは、当該科目をどの時期に学習すれば良いのであろうか。森本(2012)⁽⁴⁾は、『「子どもの保健Ⅱ」は、理論を学ぶ「講義」と現場における実践や応用を学ぶ「実習」をつなぐ役割としても重要であり、理論と実践の相乗効果を考えた演習科目としての全般的な授業検討が必要であると考え。筆者は「子どもの保健」も担当していることから、講義と演習の繋がりを意識した内容構成や、実習が効果的に進められていくための履修時期も含めた授業検討が必要ではないだろうか。』と述べている。しかし、児童福祉法で定められている指定保育士養成施設指定基準では、保育実習を行う時期は、原則として、修業年限が2年の指定保育士養成施設については第2学年の期間内とし、修業年限が3年以上の指定保育士養成施設については第3学年以降の期間内となっている。このことから、大学での学習(理論)と保育現場での実習(実践)を同時並行的に進めていくことは容易ではなく、多くの保育者養成施設では当該科目を低学年で開講しており、本学では第1学年となっている。このギャップを少しでも埋めるためには、講義と演習の繋がりを意識した内容構成とすることと、前述したように保育現場でのボランティアが有効ではないかと考えている。

次に、Q5の『からだの仕組みや発達について興味がありますか』と他の項目との関連では(表1-1、1-2、1-3)、興味を持っている者ほど学習の必要性を感じており、学習態度が良好であり、

さらに復習の状況も良好であった。このことから、からだの仕組みや発達について、具体例などを用いてより興味を抱けるような学習内容にしていくことが大切であると思われた。菊地(2008)⁽⁵⁾の報告では、「演習授業のような実体験や、その実体験を構成していくこれまでの生活経験や学習などによって理論を学ぶ原動力となっていく過程について、改めて考えさせられた。」とある。学習している内容が自分自身のからだに起こっていることと関連があれば、より興味を持って学習へ臨めるのではないだろうか。

最後に、学習支援の方法についてであるが、堀川ら(2003)⁽⁶⁾は、「健康教育」の実施能力を育成する教育方法の課題の中で、「学生が随時復習や自己学習ができるよう、e-learning などを利用した学習支援方法を考案することも学びを継続させるための有効な手段である。」と述べている。本研究でも復習をする仕組みとして複数回の小テストが有効であると多数の回答があるので、e-learning を活用した小テストの導入は、知識の定着を図るための方策や授業改善のポイントの1つになり得ると思われ、今後の授業実践で試みてみたい。

参考文献

- (1) 河村勝久、志内伸光、遠隔教育としての e-Learning システムの構築、日本教育情報学会年会論文集(21) 146、2005
- (2) 坂本徳弥、授業支援システムを利用した授業方法の改善、椋山女学園大学研究論集 社会科学篇、(40)195-206、2009
- (3) 原田美枝子、看護学生による保育園実習での健康教育の学び—健康教育の学習方法の改善に向けて—(第2報)、神奈川歯科大学短期大学部紀要、(3)15-22、2016
- (4) 森本美佐、保育の視点から見た「子どもの保健Ⅱ」の授業内容—保育者と学生のアンケート結果から—、奈良文化女子短期大学紀要、(43)149-157、2012
- (5) 菊地恵、理論と実践力の結合による保育内容の指導法を目指して(2)—保育実践における領域「環境」と他領域「健康」・「人間関係」とのかかわりより—、聖園学園短期大学研究紀要(38)61-70、2008
- (6) 堀川淳子、真嶋由貴恵、石原逸子、「健康教育」の実施能力を育成する教育方法の課題—産業看護実習における集団健康教育実施後の学生の意識と気づきの分析より—、産業医科大学雑誌、25(3)、341-349、2003

(受理日 2018年1月9日)